

慣用表現の使用頻度に関する一考察

—日中母語話者の認識の比較を通じて—

牛 雨薇

【キーワード】

慣用表現、使用頻度、母語転移、中国人日本語学習者

【要旨】

本稿は慣用表現の使用頻度について、日中母語話者の捉え方の共通点と相違点を明らかにすることを目的とし、「説明的文章」等の5つの側面から日中母語話者の認識についてアンケート調査を行った。その結果、「文学的文章」に関しては両者の認識が一致するものの、「説明的文章」「日常会話」「スピーチ」に関しては両者の認識が明らかに異なることがわかった。一方、中国人日本語学習者に対する調査では、日本語母語話者の認識と相違する点がいくつか見られた。その要因は母語の影響による可能性があるほか、個人差要因にも影響されると考えられたため、相関分析と重回帰分析に基づいて検証を試みた。

1. はじめに

慣用表現は、二つ（以上）の単語が強く結び付き、全体として一定の意味を表す表現のことである。例えば、日本語の「鬼に金棒」「一期一会」「石の上にも三年」や、中国語の「一言九鼎」「拍马屁」「百闻不如一见」等が挙げられる。

慣用表現に関する研究には多くの蓄積がある。具体的には日本語における「慣用句」の研究の発展についてまとめた呉（2017）、中国語における“成語”“諺語”などの定義や分類について論じる温（2014）等に詳しい。また、日中対照研究の領域でも、慣用表現に関する研究が多くなされているが、使用頻度についてはほとんど検討されていない。慣用表現が日中両言語においてどのくらいの頻度で使われているのかを究明するために、牛（2021）は海外小説の訳文とアニメ映画の字幕を手掛かりに調査を試みた。その結果、同じ内容を両言語で比較すると、中国語における慣用表現の使用が日本語より圧倒的に多いことが明らかになった。こうした頻度差からは、中国人学習者の日本語学習に影響をもたらす恐れがあると考えられる。例えば、例（1）のような場合¹である。

¹ ある発表で褒められた中国人学習者が、謙虚な態度を示すために、教授に返答した場面である。

(1) 「いえいえ、私はただレンガを投げて玉を引き出すだけです」

例(1)は中国語の慣用表現の干渉による不適切な日本語の産出である。下線部は「抛砖引玉²⁾」という中国語の“成語”の直訳であるが、日本語直訳では意味が通じない。このような現象について、劉(2022)は「中国語の慣用表現の影響を受けて、それに対応する日本語の慣用表現の有無を問わず、日本語に直訳または意識しても日本語母語話者に伝わらないというような経験は中国語を母語とする学習者なら誰しもしているであろうが、この点に関する研究は極めて手薄である」(p.164)と指摘している。ただ、直訳・意識の問題のみならず、両言語における慣用表現の使用頻度差も視野に入れる必要があるだろう。

そこで本稿では、慣用表現の使用頻度について、日中話者の間でどのように捉えられているのかを調査する。また、中国人日本語学習者の母語における慣用表現の使用頻度に関する認識が第二言語の習得に影響するかどうか、個人による要因の有無についても考察を行う。

2. 先行研究

慣用表現の指す範囲と定義については統一されたものではなく、研究者によって立場が異なる場合も多い。本節では、まず日中両言語における典型的な慣用表現の種類を検討するとともに、慣用表現の使用頻度に関する調査研究を紹介する。その上で、慣用表現の使用頻度からの母語転移について述べる。

2-1 日本語と中国語における典型的な慣用表現

日本語の慣用表現は、国広(1985)、今井(2014)、平井(2022)のように、「慣用句」「ことわざ・格言」「故事成語」「三字・四字熟語」の4つのカテゴリーの区分される場合が多い。

平井(2022: 49-50)は、「慣用句」、「ことわざ」、「故事成語」、「三字・四字熟語」という四つのカテゴリーをそれぞれ定義している。具体的には、「慣用句」は「日常生活における行動や様子などを比喩的にまとめた言葉のかたまり・定型句で、体の部位や動物、概念的な事象も含まれるが、字面を見ただけでは意味を理解することが困難な特別な意味を持つもの」である。「ことわざ」は「古くから言い伝えられ、教訓や風刺を含み、定型句としてそのままの形で使われるもの」であるのに対し、「故事成語」は「中国の古典などにある物語や出来事に起源を持つ、通常2~4つの漢字で構成される言葉」である。そして「三字・四字熟語」は「4つ、または3つの漢字からなり、故事成語のような物語は起源としない。同じ意味をつなげる等の特徴がある。それぞれの漢

²⁾ 発言する際に、自分の未熟な見解を述べて他の人の立派な意見を引き出すという意味に用いることが多い(『中日辞典第3版』: 1151)。

字の意味を使って説明することができるもの」とされる。

日本語のこの4つのカテゴリーに相当するものに、中国語の“成語”“諺語”“慣用語”“歇後語”がある(今井 2014)。ここでは、今井(2014)と温(2014)を取り上げる。

今井(2014: 121-129)は、中国語の慣用表現を文字数によって分類し、定義や特徴などについて日本語のそれとの比較を行っている。中国語の“慣用語”の多くは3文字で構成されるが、中には4文字のものもある。主に話し言葉で使用されることや、あまりよくないことを表すものが多いことをその特徴として挙げている。一方、“成語”は4文字で構成されるものであり、中には「2文字+2文字」という文法構造を持つものが多いとされる。これに対し、“諺語”はほとんどが5文字以上で、二つの句からなるものもあり、知識や教訓を含んでいることが特徴として挙げられている。“歇後語”は文字数に決まりはないが、必ず前半と後半、二つの句から構成される。そして歇後語は前半がなぞかけで、後半はなぞ解きという形を取るものである。

温(2014: 16-21)は、文字数のほか、語構成と意味の視点から、中国語の慣用表現を“成語”“諺語”“慣用語”“歇後語”の4つに区分している。具体的には、“成語”は、四文字のタイプが中心で、「表述型³」と「描述型⁴」とに分けられる。語構成から見れば、成語は「二二相承(2文字+2文字の構造)」で、中でも「並列」の文法構造を持つ場合が多いとされる。“慣用語”は「描述型」に属するもので、民衆によって口頭で伝わってきたものが多く見られる。文字数に制限も特にない。これに対し、“諺語”は「表述型」であり、“慣用語”と同様に字数の制限がない。このほか、“歇後語”は「泥菩薩过河—自身难保」のように前半の「引子」と後半の「注釈」という二つの部分からなるものであり、「引述語」と呼ばれている。

本研究では上述の先行研究を踏まえた上で、日本語における「慣用句」「ことわざ・格言」「故事成語」「三字・四字熟語」、中国語における“成語”“諺語”“慣用語”“歇後語”を典型的な慣用表現として捉えることとする。

2-2 慣用表現の使用頻度についての調査研究

語学領域の研究における使用頻度(frequency)は、ある表現がどの程度1つの言語に現れるかを示すものとされる(陳 2019: 21)。慣用表現の使用頻度についての研究には、平井(2022)、劉・秦(2007)などがある。

平井(2022: 47-78)は、「日経テレコン」にアーカイブされた記事や文章を手がかりに、日本語の慣用句、ことわざ、故事成語、四字・三字熟語という四つのカテゴリーの語の使用頻度(出現頻度)について調査している。検索語の選択基準として、『クリアカラー国語便覧』(2013)と『原色シグマ新国語便覧—ビジュアル資料』(2007)が

³ 表述型：物事に対する認識や社会的実践の中で蓄積された経験など、内容が非常に豊富で知識が含まれることばである。

⁴ 描述型：人や物の状態を表したり、行為の本質を述べたりすることばである。

使用され、この 2 冊に共通して掲載されているものを検索語としている（合計 260 語）。平井（2022）は、検索語の出現回数を元に多い順から一覧表を作成する上で、日本語教育の視点から慣用表現の教え方について提案し、さらに日本語学習者の作文には慣用句やことわざの使用が少ない⁵ことについて、対応の仕方を指摘している。

これに対し、劉・秦（2007）の調査では、『主流报纸动态流通语料库（DCC）』（1.0 版）というコーパスを通して、2005 年中国の新聞（591315 文）における四字成語の出現頻度が調査されている。検索語となる四字成語は合計 28353 語である。その結果、新聞に出現した四字成語の 8637 語のうち、頻度が 100 回以上出現したものは 2228 語であり、さらに頻度が 1000 回以上のものは 110 語のみであった。このように、中国語には四字成語が数多く存在し、かなりの頻度で使われているが、それぞれの使用に頻度差が大きく見られることが指摘されている。

一方、日中対照研究の領域でも、四字熟語の使用頻度についての比較が見られる。例えば、顧（2017）、牛（2021）等が挙げられる。顧（2017）は、中日同形異義の 55 語の四字成語を対象に、日本の『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』（少納言）と中国の『国家语委现代汉语平衡语料库』での出現数を比較したものである。そして牛（2021）は、日中両言語で翻訳された欧米系の 3 冊の小説を手掛かりに、四字熟語の使用頻度について調査を実施している。この二つの研究によって、中国語では日本語より慣用表現の使用頻度が高いということが明らかになった。

ただし、使用頻度に関するこれらの研究は、ほとんど語学あるいは言語教育の視点から、辞書や教材の編纂または教育活動のために行われたもので、その使用頻度差が産出面に与える影響に関する研究は、まだ十分にはなされていない。

2-3 使用頻度からの母語転移（影響）

渋谷（2001：84）と李（2013：13）で示唆されたように、母語転移は音声、語彙、文法的範疇だけで起きるわけではなく、それ以外の範疇（母語の使用習慣など）にも起きる可能性がある。本稿の考察対象である慣用表現の使用頻度においても、母語（中国語）から第二言語（日本語）へ転移することが考えられる。換言すれば、中国語では慣用表現が非常によく使用されるということから日本語に影響を与え、その影響は劉（2022）で指摘された第二言語としての日本語の産出にも見られ、認識の側面にも及んでいると考えられる。

中国母語話者の使用を日本語表現的に自然なものに導くために、本研究では慣用表現の使用頻度に注目し、それに関する日中母語話者の認識の実態を調べ、日本語教育への指導に役立てたいと考える。

⁵ 平井（2020）で指摘されている。

3. 調査及び分析結果

3-1 調査方法

まず、慣用表現がよく使用されるかどうかについて、日中話者の認識を比較するために、日本語学習歴がない中国語母語話者と中国語学習歴がない日本語母語話者を対象に、アンケート調査を実施した。アンケートの構成は以下の通りである。

- a) 個人情報の収集：協力者の年齢、出身地などの情報を収集する。
- b) 調査の説明：調査の目的を説明した上、慣用表現の使用例を挙げる。その後、この説明がわかるかどうかについて質問する。
- c) 承諾書：協力者から調査の目的について同意を得るために、「私は、よく考えた後で真剣に答えることを承諾します（我承诺我会认真思考后再作答）」という内容の確認要項を示す。
- d) 質問：「説明的文章」「文学的文章」「手紙やメール」「日常会話」「スピーチ」のそれぞれで慣用表現がよく使用されるかという設問において、「1 そう思う 2 ややそう思う 3 あまりそう思わない 4 そう思わない」の四段階式評価から一つを選択することとする。質問例は以下の通りである。

日本語母語話者のアンケートの質問例

問題 1：説明文では、「慣用句」「ことわざ」「故事成語」「三字・四字熟語」がよく使用される。
 （注：説明文は実験や観察の結果わかったことや物事の仕組みや由来などについて、事実を説明した文章である。）

- 1 そう思う
- 2 ややそう思う
- 3 あまりそう思わない
- 4 そう思わない

中国語母語話者へのアンケートの質問例

问题一：在说明文中会经常使用到惯用语、成语、谚语、歇后语。
 （注：“说明文”是客观地说明事物或阐明事理的一种文体、目的在于给人以知识：或说明事物的状态、性质、功能、或阐明事理。）

- 1 赞同
- 2 比较赞同
- 3 不太赞同
- 4 不赞同

本調査は2022年7月からの約2ヶ月の間に実施した。中国語母語話者を対象とした調査では問巻星⁶というネットワークを用い、日本語母語話者を対象とした調査ではグループフォームを利用した。

アンケートから得たデータは、平均値と標準偏差から分析を行った。そして、日中母語話者の回答分布表をそれぞれ示した上で、*t*検定⁷を利用して日中母語話者の認識にお

⁶ 問巻星は中国の専門的なオンライン調査、試験、評価のサイトである。

⁷ 本調査の場合、日本語母語話者と中国語母語話者とのサンプルの量が異なる。そのため、excelで「*t*検定：分散が等しくないと仮定した2標本による検定」を利用し、仮説平均と

ける相違点または共通点について分析を行った。

3-2 調査結果

調査協力者は、中国語母語話者が 86 名、日本語母語話者が 52 名、合計 138 名である。調査の時点で学部または大学院に在籍している者が多く、加えて若年層（10 代、20 代）が中心となった。アンケートの (b) と (c) で「いいえ」を選んだ人を排除し、協力者の学歴を高等教育機関（専門学校、大学、大学院）に限った結果⁸、96 人が分析対象となった。その内訳は、中国語母語話者（以下、CN）が 50 名、日本語母語話者（以下、JN）が 46 名である。

以下 3-2-1 節と 3-3-2 節では、アンケートの結果と分析について述べる。

3-2-1 平均値と標準偏差による分析結果

まず、各項目の平均値および標準偏差を表 1 と 2 に示す。

表 1 平均値 M

| | 説明文 | 文学文 | 手紙や メール | 日常会 話 | スピー チ |
|----|------|------|------------|----------|----------|
| JN | 2.72 | 1.52 | 2.61 | 2.22 | 2.52 |
| CN | 2.00 | 1.34 | 2.30 | 1.48 | 1.82 |

表 2 標準偏差 SD

| | 説明文 | 文学文 | 手紙や メール | 日常会 話 | スピー チ |
|----|--------|--------|------------|----------|----------|
| JN | 0.8343 | 0.8094 | 0.9304 | 1.0523 | 0.7525 |
| CN | 1.0302 | 0.5194 | 1.0546 | 0.6141 | 0.8254 |

平均値と標準偏差からは、日中母語話者の賛否傾向にデータのばらつきが見られる。ここでは、中央値 2.5 を基準にして、(1~2.5) (2.5~4) という二つのグループに分けた。そして ($M \pm SD$) を計算し、(2.5~4) に含まれるなら、全体的に否定の傾向が高まることを意味する。逆に (1~2.5) に含まれるなら、全体的に賛同の傾向が高まることを意味する。

表 1 と表 2 では、中国語母語話者は今回の五つの調査項目のいずれにも賛同の意を表しており、とりわけ「文学的文章」および「日常会話」という二項目では深く同意する傾向が見られる。しかも、この二項目における選択が極めて集中していることが表 2 からわかる。一方、日本語母語話者は「文学的文章」および「日常会話」以外の調査項目に同意しない傾向が見られる。だが、表 2 からみると、日本語母語話者の選択はいずれもばらつきの幅が大きい。このように、本稿で調査した五つの項目の中で、日中母語話者の認識が一致するのは「文学的文章」のみであることがわかった。

の差異を 0 にして有意水準「 α 」はデフォルトで 0.05 (5%) を入力した。

⁸ 次の節で考察対象としての中国人留学生と比較するために限定している。

3-2-2 日中母語話者の回答分布及び t 検定による分析結果

問題 1「説明的文章では慣用表現がよく使用されるか」について、日中母語話者の選択分布を表 3 に提示する。中国語母語話者は「1 賛同（そう思う）」の人が一番多く、選択肢 1 と 2 が全体の 68%を占める。一方、日本語母語話者の回答は中国語母語話者と正反対であり、「3 あまりそう思わない」の人が一番多く、さらに選択肢 3 と 4 が全体の 65%を占める。 t 検定を行った結果、有意差がある ($p<0.05$) であった。このことから、説明的文章での慣用表現の使用頻度に関しては、日中母語話者の認知はかなり異なり、中国語母語話者は賛同の傾向にあり、日本語母語話者は賛同しない傾向にあると言える。

表 3 問題 1 の回答分布表

| 慣用表現がよく使用される | CN | JN |
|-------------------|--------|--------|
| 1 そう思う（賛同） | 21.42% | 8.70% |
| 2 ややそう思う（比較賛同） | 26% | 26.09% |
| 3 あまりそう思わない（不太賛同） | 22% | 50% |
| 4 そう思わない（不賛同） | 10% | 15.22% |

問題 2「文学的文章（物語や小説など）で慣用表現がよく使用されるか」について、日中母語話者の選択分布は表 4 で示したように、両方とも「1 そう思う（賛同）」または「2 ややそう思う（比較賛同）」と考えている人が非常に多く、約 9 割を占める。なお、 t 検定の結果、有意差は見られなかった ($p>0.05$)。すなわち、文学的文章での慣用表現の使用頻度に関しては、日本語母語話者と中国語母語話者の意見が一致しており、ほぼ賛同に傾いている。

表 4 問題 2 の回答分布表

| 慣用表現がよく使用される | CN | JN |
|-------------------|-----|--------|
| 1 そう思う（賛同） | 68% | 63.04% |
| 2 ややそう思う（比較賛同） | 30% | 26.09% |
| 3 あまりそう思わない（不太賛同） | 2% | 6.52% |
| 4 そう思わない（不賛同） | 0% | 4.35% |

次に、問題 3「手紙やメールで慣用表現がよく使用されるか」についての調査結果を述べる。表 5 のように、日中母語話者とも「3 あまりそう思わない（不太賛同）」と考えている人が最も多い。一方、日中母語話者の認知には多少の違いが見られる。中国語母語話者の場合、選択肢 1 と 2 の人数が選択肢 3 と 4 の人数と同様であるが、日本語母語話者の場合、選択肢 3 と 4 の人数が若干多いことがわかった。ただし、その違いは t

検定の結果に反映されておらず ($p>0.05$)、日中母語話者の認知が統計的に異なるとは言えない。

要因としては、手紙かメールかによって、慣用表現の使用習慣が違ってくることが挙げられる。手紙もメールも何かのメッセージを伝えるために使用される通信の手段である。だが、性質が多少異なる。手紙の場合は、相手により自分の気持ちを伝える文章を書くことが多いのではないだろうか。その場合には慣用表現がよく出現する。メールは、特にビジネスの場面では、素早く必要事項を伝えることが最も重視され、文章を推考する時間に限りがある。その場合には、慣用表現の使用が少なくなることが考えられる。

表 5 問題 3 の回答分布表

| 慣用表現がよく使用される | CN | JN |
|--------------------|-----|--------|
| 1 そう思う (賛同) | 32% | 15.22% |
| 2 ややそう思う (比較賛同) | 18% | 23.91% |
| 3 あまりそう思わない (不太賛同) | 38% | 45.65% |
| 4 そう思わない (不賛同) | 12% | 15.22% |

問題 4、「日常会話で慣用表現がよく使用されるか」について、日中話者の判断を以下表 6 で示す。表 6 より、中国語母語話者は選択肢 1 と 2 が 94% を占め、日本語母語話者は 1 と 2 が多数であるが、中国語話者よりその割合 (67.39%) が低いことがわかった。また、 t 検定によって有意差がある ($p<0.05$) と判明した。これは日中母語話者ともに賛同する傾向を表しているが、日本語母語話者のほうは回答がより分散しているためと考えられる。

日常会話に関する日本語母語話者の回答にばらつきが見られた要因の一つは、話題によって慣用表現の使用頻度における違いが考えられる。挨拶したり、学校生活や仕事に関して話したり、買い物などのやりとりをしたりする場合、慣用表現の使用が少ないと考えられる。これに対し、文化や歴史などに関して議論する場合は慣用表現が多用される傾向になると考えられる。

表 6 問題 4 の回答分布表

| 慣用表現がよく使用される | CN | JN |
|--------------------|-----|--------|
| 1 そう思う (賛同) | 58% | 28.26% |
| 2 ややそう思う (比較賛同) | 36% | 39.13% |
| 3 あまりそう思わない (不太賛同) | 6% | 15.22% |
| 4 そう思わない (不賛同) | 0% | 17.39% |

問題 5、「スピーチ（講演、発表）で慣用表現がよく使用されるか」について、日中話者の選択は、表 7 のように分布している。表 7 によると、中国語母語話者は、「1 賛同（そう思う）」や「2 比较賛同（ややそう思う）」を選択した人が約 8 割である。それに対して、日本語話者は「3 あまりそう思わない」を選択した人が一番多く、6 割を占める。なお、*t* 検定を行った結果、有意差が見られた ($p<0.05$)。日中話者の認知には相違があると言える。中国語母語話者は意見が一致しており、賛同の割合が高いが、日本語話者はほぼ賛同しない傾向が見られた。

表 7 問題 5 の回答分布表

| 慣用表現がよく使用される | CL | JN |
|-------------------|-----|--------|
| 1 そう思う（賛同） | 42% | 13.04% |
| 2 ややそう思う（比较賛同） | 36% | 26.09% |
| 3 あまりそう思わない（不太賛同） | 20% | 60.87% |
| 4 そう思わない（不賛同） | 2% | 2.17% |

以上をまとめると、慣用表現がよく使用されるかどうかに対する日・中母語話者の認知を *t* 検定によって分析した結果、問題 1（説明的文章）と問題 4（日常会話）と問題 5（スピーチ）では、日中母語話者の認知の相違が見られた。これに対して、問題 2（文学的文章）では、日中母語話者の認知がほぼ同様であった。

3-3 中国人日本語学習者を対象とした調査について

本節では、中国人日本語学習者（以下学習者と略す）を対象とし、前節で行った調査と同じ内容の調査を日中両言語において実施した結果を述べる。具体的には、学習者が母語（中国語）及び第二言語（日本語）の慣用表現の使用頻度についてどのように捉えているのか、前節の日中母語話者に対する調査の結果とは相違があるか否かについて考察していく。

3-3-1 学習者の情報

学習者は東京都及び埼玉県内の大学に在籍している中国人留学生の合計 72 名である。そのうち、15 人を除外した⁹。分析対象とした 57 人の情報は下記の通りである。

今回は、20 代の学習者を中心とした調査となった。学習者の滞日年数と日本語学習歴に関しては、表 8 と表 9 で示したように、中長期在留者が数多く存在する。また、日本語を 3 年以上続けて勉強している人が圧倒的に多く見られる。そして、日本語レベルを調査したところ、この 57 人のうち、上級学習者は 49 人、全体の 8 割以上を占めてお

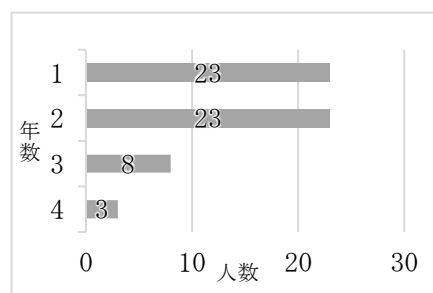
⁹ 理由：①慣用表現の定義や例示に対して理解できない ②日本語能力試験（JLPT）等の検定試験をまだ受けていない ③回答の時間が極めて短い。

り、中級学習者は8人のみであった。さらに、日本語以外の外国語学習について、ほぼ全員が英語の学習歴を持っており、10年以上続けて勉強している人も見られた。英語の他、韓国語、フランス語、ドイツ語等を勉強している人も存在する。

表8 学習者の滞日年数

| 滞日年数 | 人数 |
|----------|----|
| 5年（5年以上） | 13 |
| 3年～5年未満 | 20 |
| 1年～3年未満 | 10 |
| 1年未満 | 14 |

表9 学習者の日本語学習歴



（年数通し番号1：5年以上（5年を含む）、2：3年～5年未満、3：1年～3年未満、4：1年未満）

3-3-2 学習者に対する調査の結果

学習者の調査結果を、表10と表11に示す。表10は学習者の回答分布を表しており、表11は回答の平均値と標準偏差を表している。

表10 回答分布のまとめ表

| 問題順 | 選択肢 | | | |
|-------------|-----------|--------------|-----------------|-----------|
| | 1 そう思う | 2 やや そう思う | 3 あまりそう 思わない | 4 そう思わない |
| 1 中国語の説明文 | 17、29.82% | 23、40.35% | 15、26.32% | 2、3.51% |
| 2 中国語の文学文 | 38、66.67% | 13、22.81% | 5、8.77% | 1、1.75% |
| 3 中国語の手紙など | 10、17.54% | 20、35.09% | 22、38.60% | 5、8.77% |
| 4 日本語の説明文 | 3、5.26% | 13、22.81% | 31、54.39% | 10、17.54% |
| 5 日本語の文学文 | 13、22.81% | 18、31.58% | 19、33.33% | 7、12.28% |
| 6 日本語の手紙など | 2、3.51% | 17、29.82% | 22、38.60% | 16、28.07% |
| 7 中国語の日常会話 | 32、56.14% | 14、24.56% | 10、17.54% | 1、1.75% |
| 8 中国語のスピーチ | 27、47.37% | 25、43.66% | 3、5.26% | 2、3.51% |
| 9 日本語の日常会話 | 13、22.81% | 15、26.32% | 13、22.81% | 16、28.07% |
| 10 日本語のスピーチ | 6、10.53% | 18、31.58% | 26、45.61% | 7、12.28% |

表 11 回答の平均値 M と標準偏差 SD

| | | 説明文 | 文学文 | 手紙や メール | 日常会話 | スピーチ |
|------|-----|--------|--------|------------|--------|--------|
| M | 中国語 | 2.04 | 1.46 | 2.39 | 1.65 | 1.65 |
| | 日本語 | 2.84 | 2.35 | 2.91 | 2.53 | 2.60 |
| SD | 中国語 | 0.8444 | 0.7336 | 0.8814 | 0.8343 | 0.7438 |
| | 日本語 | 0.7744 | 0.9727 | 0.8511 | 1.1197 | 0.8422 |

そして、表 10 と表 11 のデータと日中母語話者のデータ（3-2-1 節の表 1 と表 2）を比較すると、次のようなことが明らかになった。

- 1) 中国語における問題に関しては、学習者の回答が中国語母語話者の回答と非常に近似しており、加えて t 検定の結果、有意差がないため、第二言語の日本語から母語の中国語への逆影響は、本調査では見つからなかった。
- 2) 日本語における問題に関して、平均値の比較では、学習者と日本語母語話者は日本語の「日常会話」について認識の差異が見られた。日本語母語話者の選択に比べ、学習者は若干反対の傾向があった。ただし、学習者と日本語母語話者共に標準偏差が高いことも見られた。 t 検定により、日本語における問題の中で学習者と日本語母語話者の認識が明らかに相違する項目は「文学的文章」のみであった。この場合、日本語母語話者は賛同の割合がかなり高い（89.13%）が、一方、学習者は賛同に傾く傾向（54.39%）とそうでない傾向（45.61%）の人の割合がほぼ同じであるため、大きな相違が認められた。

4. 考察

本節では、日本語における慣用表現の使用頻度に関して、学習者と日本語母語話者の認識が異なっている項目は、学習者の母語（中国語）からの影響か否か、また個人差による影響が強いのか否かについて、統計学の視点から考察する。

まず、母語（中国語）からの影響を観察するために、ここでは、相関分析という手法を用いて分析を試みる。相関分析を用いると、学習者の複数の回答がどの程度同じような動きをするか、即ち複数の回答の間の関係性が観察できる。そして、相関の強弱については、統計学の汎用的な基準によって判断することとした¹⁰。

表 12 で示したように、同一の項目に対する日中回答（灰色部分）を相関分析すると、五つの項目は全て正の相関関係であることがわかった。つまり、一方の賛成傾向が強く

¹⁰ 相関係数は (-1~1) の間で割り出され、1 に近い場合は正の相関が強く、-1 に近い場合は負の相関が強い。また、その絶対値が 1 に近いほど、相関関係が強くなると考えられる。次のように解釈される場合が多いようである。「0~0.2 : ほとんど相関関係がない 0.2~0.4 : やや相関関係がある 0.4~0.7 : かなり相関関係がある 0.7~1 : 強い相関関係がある」とされる。

なれば、もう一方の賛成傾向も強くなると言えよう。ここでは、学習者と日本語母語話者の認識が異なる「文学的文章」と「日常会話」という二つの項目に注目する。「文学的文章」に関する中国語の問題 2 と日本語の問題 5 にはやや相関関係があり、「日常会話」に関する中国語の問題 7 と日本語の問題 9 にはかなり相関関係があることが認められた。「日常会話」のほか、「スピーチ」に関する中国語の問題 8 と日本語の問題 10 にもかなり相関関係が存在することも観察された。

以上を踏まえ、「文学的文章」の場合、中国語の慣用表現が頻繁に使用される習慣が第二言語（日本語）に影響する可能性があり、「日常会話」及び「スピーチ」の場合、その可能性がさらに高くなると考えられる。

表 12 相関分析

| 通し 番号 | 1 中国語 説明文 | 2 中国語 文学文 | 3 中国語 手紙等 | 4 日本語 説明文 | 5 日本語 文学文 | 6 日本語 手紙等 | 7 中国語 日常会話 | 8 中国語 スピーチ | 9 日本語 日常会話 | 10 日本語 スピーチ |
|----------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|---------------|---------------|---------------|----------------|
| 1 | 1.0000 | | | | | | | | | |
| 2 | 0.0602 | 1.0000 | | | | | | | | |
| 3 | 0.1494 | 0.3028 | 1.0000 | | | | | | | |
| 4 | 0.3090 | 0.0662 | -0.0399 | 1.0000 | | | | | | |
| 5 | -0.0153 | 0.3473 | 0.1100 | 0.0986 | 1.0000 | | | | | |
| 6 | -0.0950 | 0.2940 | 0.3792 | 0.3038 | 0.2104 | 1.0000 | | | | |
| 7 | 0.3219 | 0.0619 | 0.3574 | -0.1149 | -0.0436 | -0.0693 | 1.0000 | | | |
| 8 | 0.2190 | 0.5603 | 0.5099 | 0.1501 | 0.0745 | 0.2608 | 0.2872 | 1.0000 | | |
| 9 | -0.0388 | 0.2025 | 0.0981 | 0.2211 | 0.3685 | 0.2554 | 0.4115 | 0.1614 | 1.0000 | |
| 10 | 0.0705 | 0.3610 | 0.2857 | 0.1744 | 0.3285 | 0.2238 | -0.0018 | 0.4826 | 0.3050 | 1.0000 |

次に、日本語学習の個人差による影響が強いかどうかを判断するために、重回帰分析という手法を用い、因子分析をした。ここでは、重回帰分析の変数を「滞日年数」「日本語学習の年数」「N1 資格の有無」「日本語以外の外国語学習経歴の有無」¹¹と設定し、それぞれ回帰係数を計算して以下表 13 に整理した。

表 13 重回帰分析表

¹¹ 年数変数：通し番号 1 は 5 年以上（5 年を含む）、2 は 3 年～5 年未満、3 は 1 年～3 年未満、4 は 1 年未満を意味する。資格・経験変数：ありの場合は 1、なしの場合は 0 である。

| | 問 1 | 問 2 | 問 3 | 問 4 | 問 5 | 問 6 | 問 7 | 問 8 | 問 9 | 問 10 |
|---------------|---------|---------|---------|---------------|----------------|---------------|---------|---------|---------------|----------------|
| Intercept | 1.5653 | 1.5453 | 3.0965 | 2.3137 | 2.9302 | 3.3536 | 1.7971 | 2.2295 | 2.4331 | 3.5551 |
| 滞日年数 | 0.2134 | 0.0603 | 0.3054 | -0.0521 | 0.0293 | -0.1448 | 0.0801 | 0.1649 | -0.0976 | 0.0438 |
| 日本語 学習年数 | -0.0062 | 0.0160 | -0.2561 | 0.0317 | -0.1294 | -0.1598 | 0.0222 | -0.0972 | <u>0.2621</u> | -0.0135 |
| N1 有無 | -0.0722 | 0.0900 | -0.2991 | 0.0122 | <u>-0.6040</u> | -0.0765 | -0.0209 | 0.0908 | -0.2130 | -0.2668 |
| 外国語学習 経歴有無 | 0.0260 | -0.3707 | -0.7756 | <u>0.6308</u> | 0.1263 | <u>0.2937</u> | -0.3933 | -0.9496 | 0.0381 | <u>-0.8674</u> |

この表から見れば、問題 5（文学的文章）と問題 9（日常会話）は、それぞれ「N1 資格の有無（日本語のレベル）」、「日本語の学習年数」という個人的要因に影響されている。問題 5 の場合、日本語能力試験 N1 の資格を持つ学習者はそうでない学習者より賛同する傾向が強い。そして問題 9 の場合、学習者は日本語の学習年数の増加に伴い、賛同の程度が強くなると考えられる。全体的に見れば、日本語における諸問題は「日本語学習の年数」「N1 資格の有無」「日本語以外の外国語学習経歴の有無」に影響されているものの、それらの影響は大きいとは言えないことがわかった。

5. おわりに

以上、慣用表現の使用頻度に関して、日中母語話者の認識を調査した。結果を要約すると、日中母語話者の認識には 2 点の相違点がある。(1)「説明的文章」と「日常会話」については、日中母語話者の認識が異なっており、中国語母語話者は慣用表現がよく使用されることに賛同し、日本語母語話者はそうではないと考えていることがわかった。(2)標準偏差から、日本語母語話者は中国語母語話者より意見が散らばることも明らかになった。この 2 つの相違点に対し、共通点も 1 つ挙げられる。それは、「文学的文章」に関して日中話者の認識がともに賛同する傾向になるという点である。

一方、日本語の「文学的文章」について学習者と日本語母語話者を比較した場合、認識が明らかに異なっており、その差異は賛否の割合と標準偏差を反映したものと考えられる。

そして、学習者のデータについて相関分析と重回帰分析を行った結果、「文学的文章」という書き言葉の場合では、中国語において慣用表現が頻繁に使用されるという認識が第二言語（日本語）に影響する可能性があり、また「日常会話」及び「スピーチ」という話し言葉の場合では、慣用表現の使用頻度差から認識の転移を起こす可能性がさらに高いと考えられる。母語影響のほか、「日本語学習の年数」「N1 資格の有無」「日本語以外の外国語学習経歴の有無」という個人的要因もあるものの、影響はあまり大きくないと推察される。

本調査の結果は調査協力者の直感に基づいており、慣用表現は実際にどのくらいの頻

度で使用されるのか、頻繁に使用される慣用表現はどのように学習者の産出に影響するのかといった課題については、引き続き考察してゆく必要がある。

参考文献

- 今井俊彦 (2014) 「ことわざ・慣用句」『日本語ライブラリー日本語と中国語』朝倉書店出版, 沖森卓也・蘇紅 (編), pp.122-129
- 温端政・温朔彬 (2014) 『慣用語』商務印書館出版
- 桂小蘭 (1992) 「日本語と中国語の慣用句に関する一考察—慣用句構成語の比較を中心に—」『大阪大学言語文化学』大阪大学言語文化学会出版, 1, pp.93-102
- 国広哲弥 (1985) 「慣用句論」『日本語学』明治書院出版, 4-1, pp.62-75
- 顾诗怡 (2017) 「中日同形异义四字成语使用情况调查」『教育教学论坛』38, pp.78-79
- 呉琳 (2017) 「日本語の慣用句に関する研究の概観」『日中語彙研究』愛知大学中日大辞典編纂所出版, 6, pp.87-105
- 渋谷勝己 (2001) 「学習者の母語の影響」『日本語学習者の文法習得』大修館書店出版, 野田尚史・迫田久美子ら (編), pp.83-94
- 陳力偉 (2008) 『日本の諺・中国の諺—両国の文化の違いを知る—』明治書院出版
- 陳雯 (2019) 「慣用句の産出と理解に関わる諸要因—日本語学習者と日本語母語話者の比較を通じて—」(博士論文)
- 牛雨薇 (2021) 「日中両言語における四字熟語の使用頻度に関する一考察—欧米文学作品の日中訳本を手掛かりに—」『日本アジア研究 (埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要)』埼玉大学大学院文化科学研究科出版, 18, pp.1-22
- 平井一樹 (2020) 「日本語教育における諺や慣用句・慣用表現—複数の書き言葉コーパスにおける韓国語・中国語母語話者の使用実態から—」『韓国文化研究』韓国文化学会出版, 3, pp.41-61
- 平井一樹 (2022) 「ことわざ、故事成語、慣用句・表現、四字・三字熟語について—均衡コーパスと日経テレコンを使用した分析および理解表現として日本語学習で扱うための提案—」『甲南大学総合研究所叢書』甲南大学総合研究所出版, 145, pp.47-78
- 彭広陸 (2012) 「中国における中日語彙対照研究の動向」『日中語彙研究』愛知大学中日大辞典編纂所出版, 1, pp.57-62
- 宮地裕 (1985) 「慣用句の周辺—連語、ことわざ、複合語—」『日本語学』明治書院出版, 4-1, pp.62-75
- 劉志偉 (2022) 「慣用表現学習上の問題点について—中国語の慣用表現を受けての日本語「産出困難」も視野にいれて—」『埼玉大学紀要 (教養学部)』58-1, pp.163-179
- 刘長征・秦鹏 (2007) 「基于中国主流报纸动态流通语料库 (DCC) 的成语使用情况调查」『语言文字应用』3, pp.78-86

(埼玉大学大学院人文社会科学研究所博士後期課程)